

Miyake, N.(2001) Supporting collaborative reflection for knowledge integration : Computer Support for a collaborative learning community in undergraduate cognitive science courses ICCE/ScoolNet2001 at Korea 2001/11/11-15 InvitedTalk Proceedings of ICCE/ScoolNet2001 Vol.1 pp22-23

Collaborative curriculum

成功する協調学習のカリキュラムは、よく考えられたコースワークと比較的シンプルだが、よくデザインされているツールとの結合によって生まれる

(A successful collaborative curriculum is often a combination of well thought-out course work and a set of relatively simple but well designed tools.)

この結合を活かすためには

- 1．カリキュラム自身が、より大きなコースシーケンスへと組織化される必要がある。
- 2．そうであるが故に、学習者は自らが利用する協調学習のコースを、より進んだものに再構築できる。
- 3．そして、コースのシーケンスは学習者共同体のベースをなすようなものでなければならない。

Jun Note

三宅先生は、「協調学習カリキュラム（学習者の学習経験）＝コースワーク＋ツール」と位置づけていらっしゃいますが、この考え方には全く同感である。コミュニケーションツールのみで協調学習が保証されるわけではないし、カリキュラムのみでそれがなされるわけではない。協調学習を研究するということは、そういうカリキュラムを構築することになるのであろう。

そして、「カリキュラムを構築する」ということは、ある学習の場での学習者の活動の流れをデザインすること他にない。たとえば、ツールをどのように使い、どこでどういうモノを読むか、などという具体的な活動の流れを予想しつつ、コースワークとツールをどのようにデザインし、そこでどういう活動をさせるかということを考えることである。

ところで、こうした「協調学習カリキュラム＝コースワーク＋ツール」という考え方自体は、実は従来の CSCL ではあまり考えてこられなかった。なぜか？それは、従来の CSCL の研究開発の主眼が、コミュニケーションツールの研究に注力されていたからである。非常に効率よく、かつ建設的な議論ができるツールがありさえすれば、学習者が有能な他者と対話的な関係を結び、文化適応＝学習可能であるはずだ、という素朴な背後仮説が、かつての研究には存在していた。少なくとも筆者にはそう見受けられる。

ところが、たとえば M.Linn の WISE などの近年の CSCL は「協調学習カリキュラム＝

コースワーク＋ツール」という考え方を明確に打ち出してきた。そして、このことは、近年流行している eLearning(WBT)と CSCL が結びつくことを予期している。

従来の eLearning (WBT) は非常に CAI 的なドリル＆プラクティスを行うツールという色彩が強かったが、最近発売されている eLearning のプラットフォームは、協調学習の支援機能が非常に充実している。従来の eLearning が得意としていた教材の提示・管理機能にコラボレーション機能が追加され、Learning Community を作りだすインフラストラクチャは確立された感がある。もちろん、こうしたツールは常に改善の余地を残しているので、さらなる基盤技術の確立のために、基礎的な開発研究が必要であることは言うまでもない。

しかし、通常、実践としての CSCL を行う際には、こうしたツールを用いつつ、必要であればツールをリ・デザインし、どういう場所で誰を対象に、どういうコースワークを準備し、どういう活動をさせるかを考える必要があるだろう。いわゆる「How it can be redesign?」「How it can be used?」ということを考えるのである。